

# ステファン・ランカ：ウイルス理論を解体する ～はしかウイルスを例として～

ドイツの雑誌「サイエンティフィック・プラス」2015年6月の記事です。（翻訳ツールによる私訳）  
<https://wissenschaftplus.de/uploads/article/Dismantling-the-Virus-Theory.pdf>

なぜウイルスの存在を疑わなければならないのでしょうか？  
ウイルスとは何であり、何ではないのでしょうか？  
ウイルスの存在はどのようにして科学的に証明されているのでしょうか？

著者 ステファン・ランカ博士

科学者はすべてのことに疑問を投げかけなければならないし、特に自分たちが最も愛しているもの、つまり自分たち自身の発見やアイデアに疑問を抱かなければなりません。科学研究のこの基本的なルールは、誤った展開を避け、すでに存在するものを明らかにするのに役立ちます。また、私たちは皆、現状に疑問を持つことを許されなければなりません。さらに、科学は選ばれた数の機関や専門家に限定されるものではありません。科学は、必要な知識と適切な方法を持っている人であれば、誰でも行うことができますし、そうしなければなりません。

科学は、その主張が検証可能で、再現性があり、予測を可能にする場合にのみ、科学とみなすことができます。科学はまた、外部からのコントロールも必要とします。生物学、生命の発生、組織、身体、脳の発達と機能に関する知識を持っている人なら誰でも、ウイルスに関する仮定に自ずと疑問を抱くことになるでしょう。

身体とそのメカニズムの現実には、仮説的な悪性プロセスが存在する余地はありません。苦しみ、痛み、死に至る可能性のあるものを含め、すべての生物学的プロセスは、本来、有用なものであることを意図しています。

病原性ウイルスに関する科学論文を読んで、ある程度の予備知識を持った素人であれば誰でも、そのようなウイルスは存在せず、記述されているのは細胞の典型的な構成要素と特徴に過ぎないことを理解することができます。この論文では、そのような予備知識を提供します。

## 考え方の原点

現在のウイルスの概念は、すべての病気は毒（毒素）によって引き起こされ、人々は「解毒剤」として「抗毒素」を生産することによって健康を取り戻すという古代の考えに基づいています。確かに、いくつかの病気は毒によって引き起こされています。その後、「解毒剤」を生産したり、与えられたりすることで、体が健康を取り戻すという考えが生まれたのは、アルコールなどの大量の毒物をゆっくりと摂取して体を鍛えると、生き延びることができるという観察からです。しかし、実際には解毒剤は存在せず、毒（アルコール）を中和・除去する酵素を体内で生産しています。

1858年、現代医学の創設者である Rudof Virchow は他の科学者の発見を盗用し、彼らの本質的な発見を抑制し、それにより病気の原因についての誤った見解が生まれ、教義（ドグマ）となりました。この教義によれば、すべての病気はおそらく細胞内で発生します。[1]

Virchow の細胞病理学は古代の医学に再導入され、体液性の教義に反論し、病気は病原性毒（ラテン

語：ウイルス) から発症すると主張しました。

しかし、細菌が発見されたときには、その細菌が病原性の毒を作っていると考えられていました。この仮説は「細菌説」と呼ばれ、すぐに受け入れられ、現在に至るまで大成功を収めています。この説があまりにも成功しているため、いわゆる細菌の毒素と呼ばれるものが、実は正常な酵素であり、人間の体内には出現しないか、出現しても危険なほどの量では出現しないという事実を、大多数の人は未だに知らないのです。

その後、細菌がゆっくりと死滅し始めると、細菌は生存のための小さな、一見命のない形の、いわゆる孢子を作ることが発見されました。この孢子は有毒であり、いわゆる病原性の毒ではないかと疑われていましたが、生命力が回復した時に孢子は急速にバクテリアへと成長していくので、このことは反論されました。その後、研究所の科学者たちが、弱くて繁殖力の強い細菌が、孢子よりもはるかに小さな構造になりながら、急速に死滅していくのを観察したとき、最初は、細菌がウイルスと呼ばれる病原性の毒によって殺され、それによってウイルスが複製されているのではないかと考えられたのです。

発見当時はまだ目に見えないこれらの構造がバクテリアを殺していると考えられていたため、ファージ／バクテリオファージと呼ばれ、「バクテリアを食べる人」と呼ばれていました。後になって初めて、ほとんど繁殖していない、したがってほとんど生存できないバクテリアが、ファージに変化できることが明らかになりました。

電子顕微鏡の導入は、細菌が突然死したときや、高度に雑種化した細菌の代謝が、「ファージ」の添加によって生じたプロセスによって圧倒されたときに、細菌の変化に起因する構造の発見につながりました。また、見た目の異なる「ファージ」が何百種類もあることも発見されました。ファージ、いわゆる細菌性の「ウイルス」の発見は、同じように見えて同じ構造を持つヒトと動物のウイルスが存在するという誤った思い込みと信念を強化しました。これは、いくつかの異なる理由から、そうではありません。

生物学に化学的検査技術を導入した後、ファージには何千種類もの種類があり、ある種類のファージは常に同じ構造をしていることが発見されました。ファージは、核酸からなる特定の分子が、所定の数と組成のタンパク質の殻に覆われています。その後、試験管の中で高度に育種された細菌だけがファージと接触することでファージになることが発見されましたが、天然細菌や自然環境から分離されたばかりの細菌には適用されませんでした。その過程で、これらの「細菌ウイルス」が、実は重要な分子やタンパク質を他の細菌に提供する役割を果たしていること、そして細菌自身がそのような構造から生まれていることが発見されたのです。

「細菌ウイルス」が天然の細菌を殺すことはできないが、細菌の生存を助けていること、細菌自体がそのような構造から発生していることが確立される前に、この「ファージ」はすでに、ヒトや動物のウイルスのモデルとして使用されていました。「ファージ」に似たヒトや動物のウイルスは、細胞を殺して病気を引き起こすと同時に、新たな病気の毒を作り出して病気を媒介していると考えられていました。今日に至るまで、多くの明らかに新しい病気は、その起源が不明であるか、または認められていない場合は、ウイルスに起因していると考えられています。この反射的対応は、「細菌ウイルス」の発見で明らかに確認されました。

ここで重要なことは、戦いや感染の理論は、自分たちが住んでいる国や地域が戦争や逆境に見舞われていた場合にのみ、大多数の専門家に受け入れられ、高く評価されたということです。平和な時代には、他の概念が科学の世界を支配していました。[2]

ドイツから始まった感染症理論が第三帝国を経て世界化したのは、政治的に搾取されていた、感染症理論に反対し反論していたユダヤ人研究者のほとんどがその地位を追われたときに限られていることは、非常に重要です。

[3]

## ファージの検出

ファージの存在は迅速に証明することができます。

最初のステップ：ファージの存在は、細菌のファージへの変換、およびそれらのファージの電子顕微鏡写真を通して確認されます。コントロール（対照）実験では、細菌が変化しない場合や、細菌が外因的な突然の消滅によりランダムに分解を開始した場合には、ファージは形成されずに出現しないことが示されています。

第2のステップ：ファージを含む液体を濃縮し、試験管の底部では高濃度、試験管の上部では低濃度の別の液体に塗布します。その後、ファージを入れた試験管を強力に回転（遠心分離）させ、すべての粒子がその質量と重量に応じて、それぞれの密度の場所に集まります。ここでいう密度とは、単位体積あたりの重量（質量）の比であり、それぞれ  $\text{Kg}/\ell$  または  $\text{g}/\text{mg}$  で表されます。このように、同じ密度の粒子を濃縮して精製するステップを「密度勾配遠心分離」と呼ぶのはそのためです。

同じ密度の粒子が多数集まる層が「濁り」となり、これを「バンド」と呼びます。このステップをドキュメント化（？）し、「バンド」に濃縮・精製・沈降した粒子を「シリンジ針」で除去します。抽出された濃縮された量の粒子は、「単離物」と呼ばれます。速くて簡単な電子顕微鏡写真は、ファージ以外の粒子が見られない場合、分離物中のファージの存在を確認すると同時に、分離物の純度を示す指標となります。ファージの外観と直径もこの顕微鏡写真で確認することができます。このステップのために実行されるコントロール実験は、ファージを形成しなかった細菌からの液体を処理し、遠心分離することで構成されており、手順の最後にファージが示されません。

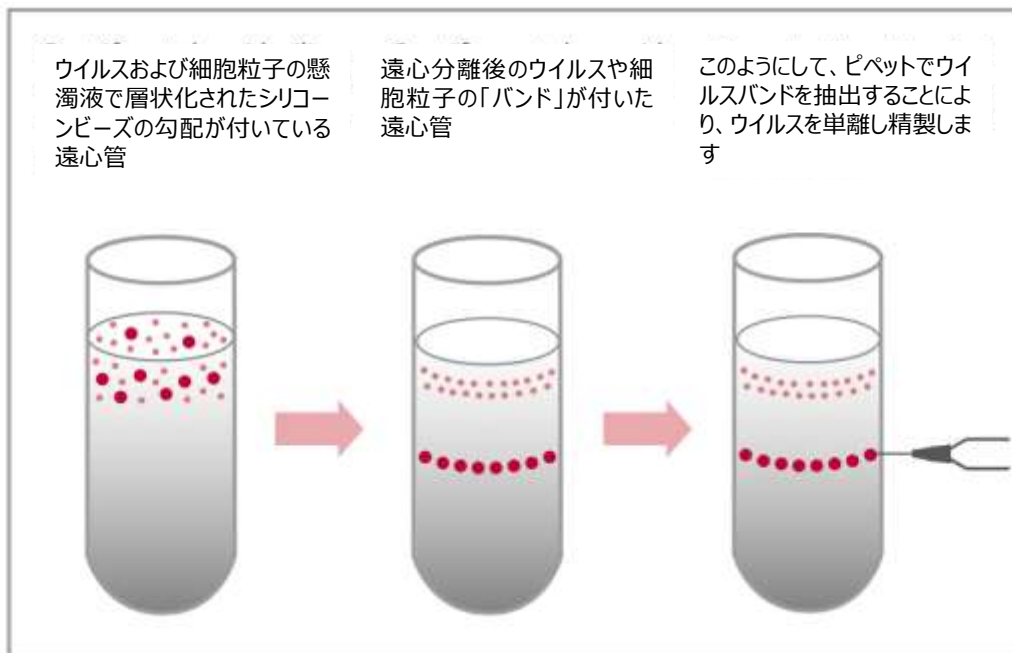
ファージの「単離」に成功した後、ファージの決定的な生化学的特徴付けは次のようになります。異なるタイプのファージが類似しているように見えることが多いため、その組成の生化学的特徴付けは、特定のタイプのファージを特定するために不可欠です。密度勾配遠心分離によって得られた単離物を、今度は2つの部分に分ける。1つは核酸の大きさ、種類、組成を決定するために使用され、もう1つは別の手順でファージのタンパク質の量、大きさ、形態を決定するために使用されます。1970年代以来、これらのテストは、すべての生物学の学生によって最初の学期に学習される単純な標準的な技術となっています。

これらの試験はファージの生化学的特徴付けを表しています。ファージは非常に単純な構造をしており、解析が非常に容易であるため、ほとんどの場合、これらの結果は1つの論文でしか発表されていません。これらの試験では、ファージを形成しない細菌の液体を使用しているため、生化学的な証拠を提示することはできません。このようにして、約2000種類のファージの存在が科学的に証明されました。

## 病原性ウイルスの疑惑の証拠

「バクテリオファージ」は、不完全なミニ胞子や細菌の構成要素として正しく定義されており、科学的には単離されていますが、病原性があるとされるウイルスは、人間や動物、あるいはその体液中で観察されたことがなく、単離されて生化学的に分析されたこともありません。今日に至るまで、この種の研究に携わった研究者は誰一人としてこのことに気づいていないようです。

密度勾配遠心法は、ウイルスの存在を証明するために科学的に必要とされる標準的な手法です。この方法は、すべての微生物学のマニュアルで「ウイルス分離技術」として説明されているにもかかわらず、病原性のあるウイルスの存在を示すことを目的とした実験には適用されていません。【次ページ図】



1945 年以降、電子顕微鏡の使用と生化学は非常にゆっくりと正常な状態に戻っていましたが、人間や動物に病原性のあるウイルスが一つも分離されていないことには誰も気がついていませんでした。そのため、1949 年から研究者たちは、ファージ（バクテリオ）に使われていたのと同じ考え方を応用して、ヒトや動物の「ウイルス」を複製することに着手したのです。

ジョン・フランクリン・エンダースは、1897 年に裕福な財政家の家系に生まれ、学業を終えた後、様々な社交界で活躍した後、不動産業者として働き、外国語を 4 年間勉強した後、彼を魅了した細菌ウイルス学に転向しました。

その後、彼はこの分野の研究で学んだアイデアや概念を、ヒトの病原性ウイルスと思われるものに単純に移植しました。エンダースは、ネガティブコントロールで確認したことのない非科学的な実験と解釈で、「ウイルス」感染症医学全体を行き詰まりに追い込んだのです。

この時点で重要なことは、エンダースは、多くの感染症の専門家と同様に、アメリカ軍のために働いていたということですが、アメリカ軍は常に伝染病の恐怖の大きな犠牲者であり、現在もその犠牲者であり続けています。主に米軍が、化学兵器以外にも細菌やウイルスの形をした生物兵器があるという誤った考えを広めたのです。

1949 年、エンダースは、疑われているポリオウイルスを試験管内で培養し、様々な組織で増殖させることに成功したと発表しました。アメリカの専門家はすぐにすべてを信じました。

エンダースが行ったことは、ポリオ髄膜炎の患者の体液を、滅菌したと主張する組織培養物に加え、ウイルスのせいで細胞が死んでいる、このようにしてウイルスが複製されている、そしてそれぞれの培養物からワクチンが収穫できると主張したのです。

当時、ポリオの流行（ポリオ＝弛緩性麻痺）は夏場に非常に多く、ポリオウイルスが原因と考えられていました。この疑惑のウイルスを根絶するために、ワクチンが使われることになったのです。

ポリオワクチンが導入された後は、多発性硬化症、弛緩性急性麻痺、無菌性髄膜炎などと再診断され、後にポリオは撲滅されたと主張されるようになりました。

実験中、エンダースらはバクテリアが細胞を殺す可能性を排除するために、組織培養物を滅菌しました。彼が考慮しなかったのは、感染の疑いのある細胞培養物を準備する際の滅菌と処理こそが、まさに細胞を殺していたということです。

その代わりに、彼は、単一のウイルスを単離したり、その生化学について説明したりすることなく、細胞病原性の効果をポリオウイルスの存在とその作用と解釈したのです。試験管内での「感染」の前の滅菌と細胞の処理が細胞を

殺していることを示すはずの、必要なネガティブコントロール実験は、一度も行われていません。しかし、エンダースはこの「パフォーマンス」のために、1954年にノーベル賞を受賞しました。

1954年は、エンダースがはしかウイルスを複製するために同じ技術を応用して発表した年でもあります。エンダースは同じ年にポリオウイルスの疑惑でノーベル賞を受賞していたので、すべての研究者は彼の技術が科学的に有効であると信じていました。

したがって今日まで、はしかの概念はすべてこの技術に基づいています。このように、はしかワクチンにはウイルスではなく、死んだサルの腎臓組織やヒトの癌細胞の粒子が含まれているのです。

今日まで、いわゆるはしかウイルスに関してネガティブコントロール実験は行われておらず、それは細胞の変性効果につながる実験室手順であることが示されました。

さらに、エンダースらによって行われたすべての主張と実験、そしてその後の研究者たちは、実際には彼らが試験管内で死にかけている細胞粒子とその活動を観察および分析しており、これらをはしかウイルスの粒子と誤解しているという唯一の客観的な結論を導きました。

## はしかウイルスを例として

以下の説明は、いわゆる（ヒトまたは動物の）「病原性ウイルス」のすべてに当てはまります。

はしかウイルスの存在を証明するための「はしか裁判」の過程で、バーデンス博士によって提供された6つの論文は、はしかウイルスの存在を信じるようになるまでの誤解の連鎖の様々な段階を、教訓的に理想的な方法で説明しています。

最初の論文は、1954年にエンダースらによって発表されました。

「はしか患者からの細胞病原体の組織培養物中での伝播」(Proc Soc Exp Biol Med. 1954 Jun; 86 (2): 277-286)。

この論文は、はしか裁判で発表された他のすべての論文と同様に、インターネット上で見つけることができます。

その実験では、エンダースらは、感染したとされる液を導入する前に、栄養液を劇的に減らし、細胞を破壊する抗生物質を細胞培養に加えました。その後の細胞の死は、はしかウイルスが存在したと誤解され、また、はしかウイルスが分離されたと誤解されました。抗生物質と同様に栄養分を奪ったことが細胞病理学的効果につながった可能性を排除するためのコントロール実験は行われませんでした。エンダースらの盲目は、戦後、冷戦中にウイルスヒステリーが激化していた中で、彼が本当に人々を助けたいと思っていたという事実によって説明できます。また、エンダースと彼の同僚の多くが医学の知識がなく、最初のはしかワクチンの開発でソ連と競っていたことから説明できます。

このような成功へのプレッシャーは、エンダースと彼の同僚たちが1954年に表明した、未知のウイルスや要因によって引き起こされたと考えられていた多くの細胞が正常に処理された後（すなわち「感染」されていない状態で）も死滅していることを観察し、指摘していたときに、自分たち自身の保留と注意を無視したことで説明できます。これらの事実と注意事項は、その後すべて無視されました。

はしか裁判で請求人が発表した2番目の論文は1959年に発表されたもので[4]、上記の理由から、エンダースが導入した技術はウイルスの単離には適切ではないと結論づけています。この反論は他のすべての研究者によって議論されていないだけでなく、無視されています。

3つ目の論文では[5]、著者らは細胞内の典型的な細胞粒子を撮影し、これをはしかウイルスと誤認しました。ウイルスは分離されていません。原因不明の理由で、別の実験でウイルスとして提示していたものの生化学的構造を決定し記述することに失敗したのです。使用された方法の短い説明では、著者らはウイルスの標準的な分離技術、すなわち密度勾配遠心法を適用していないことが読み取れます。彼らは単に試験管の底にある死んだ細胞の断片を遠心分離しただけで、その生化学的構造を記述することなく、細胞の破片をウイルスと誤認したのです。この実験のやり方からは、細胞の破片をウイルスと誤認したとしか結論づけられません。このような状況は、はしかウイルスの存在を証明するものとして請求人が提出した4番目[6]、および6番目[7]の論文にも見られます。

5番目の論文[8]は、死んだ細胞のどの核酸分子がはしかウイルスのいわゆるゲノムを表すかに関するコンセンサスプロセスを説明したレビューです。多数の研究者チームが細胞特異的分子の短い断片を操作し、その後、特定のモデルに従って、すべての断片を紙にまとめました。

しかし、非常に多くのピースからなるこのジグソーパズルは、全体として科学的に証明されておらず、ウイルスからも分離されていませんでした。はしかウイルスは、人間にも試験管にも見られなかったためです。

裁判所が選んだ専門家は、この論文がゴールドスタンダード、すなわちウイルスゲノム全体を記述していると述べています。しかしこの専門家が論文を読まなかったことは明らかです。論文の著者は、はしかウイルスゲノムの正確な分子構成と機能については、今後の研究の対象としなければならないと述べており、そのため、はしかウイルスゲノムの構造と機能についてのコンセンサスを得るためには、他のウイルスモデルに頼らなければなりません。

誰もが気づく最も簡単なことは、これらの論文や「はしかウイルス」や他の病原性ウイルスに関する他の論文と同様に、コントロール実験が一度も行われていないことです。どの研究者も密度勾配遠心法を使わず、代わりに試験管の底にある細胞の破片を遠心しただけでした。液体からすべての粒子を集めるために使用されるこの技術は、ペレット化と呼ばれています。論理的・科学的な観点から言えば、いわゆる「病原性ウイルス」に関するすべての論文において、研究者たちは実際には粒子と細胞の特徴だけを示していたと言えます。

サイエンティフィック・プラスの次号では、はしかウイルスが存在するという主張に対する科学的な反論を発表します。

また、別の論文で、いわゆるジャイアントウイルス[9]、すなわち、海中や塩基性生物のどこにでもいることができる包み込まれた核酸を説明したことを指摘したいと思います。すべての細菌ファージのように、彼らは無害であるだけでなく、有益な機能を持っています。彼らはまた、彼らの存在を証明する密度勾配遠心分離を使用して分離することができます（図を参照してください）。

Lüdtke 教授による、1999年の関連するレビュー[10]もお勧めします。彼は、ウイルス学の初期の段階では、大多数のウイルス学者は常に、自分たちがウイルスと勘違いしていた構造が細胞の構成要素であることが判明し、したがって、それらは実験の結果に過ぎず、観察された変化の原因ではないと結論づけていたと指摘しています。ファージが発見され、その特徴が明らかになった後、核酸がすべての細胞やウイルスのゲノムであるという教義が導入された後、そのようなウイルスは人間や動物にも存在するに違いないというコンセンサスが生まれました。

1992年には、核酸がすべての細胞の遺伝子型であるというドグマは、科学界では撤回されましたが、2008年には、ドイツの一部でも撤回されました。[11]しかし、病原性ウイルスのドグマは現在も推進されています。

オーストラリアのパーズグループ（エレニ・パパドピュロス-エレオピュロス、ヴァル・ターナー、ジョン・パパディミトリウが率いる）[12]は、HIVが存在することが証明されていないことを科学的な議論で証明しました。1992年に早くも私に HIV についての現実を受け入れ、事実を研究し、病原性のあるウイルスは存在しないという知識を共有する

ことを奨励し、科学的な支援を提供してくれたのは、エレニ・パドプロス-エレオプロスでした。私は彼女と彼女のチームにとっても感謝しています。

## 文献：

- [1] Siehe Ausführungen zu Virchows Leben und Wirkung in WissenschaftPlus Nr. 5/2015 und Nr. 6/2015.
- [2] Anticontagionism between 1821 and 1867. Aufsatz von Erwin H. Ackerknecht in der Zeitschrift Bulletin of the History of Medicine, Volume XXII, The Johns Hopkins Press, 1948.
- [3] Das Robert Koch-Institut im Nationalsozialismus. Buch von Annette Hinz-Wessels, 192 Seiten, 2008. Kulturverlag Kadmos Berlin.
- [4] Bech V, Magnus Pv. Studies on measles virus in monkey kidney tissue cultures. Acta Pathol Microbiol Scand. 1959; 42 (1): 75–85.
- [5] Nakai M, Imagawa DT. Electron microscopy of measles virus replication. J. Virol. 1969 Feb; 3v (2): 187–97.
- [6] Lund GA, Tyrell, DL, Bradley RD, Scraba DG. The molecular length of measles virus RNA and the structural organization of measles nucleocapsids. J. Gen. Virol. 1984 Sep;65 (Pt 9): 1535–42.
- [7] Daikoku E, Morita C, Kohno T, Sano K. Analysis of Morphology and Infectivity of Measles Virus Particles. Bulletin of the Osaka Medical College. 2007; 53 (2): 107–14.
- [8] Horikami SM, Moyer SA. Structure, Transcription, and Replication of Measles Virus. Curr Top Microbiol Immunol. 1995; 191: 35–50.
- [9] Siehe WissenschaftPlus Nr. 1/2014.
- [10] Zur Geschichte der frühen Virusforschung. Übersichtsarbeit von Prof. Karlheinz Lüdtke. Reprint 125 des MAX-PLANCK-INSTITUT FÜR WISSENSCHAFTSGESCHICHTE, 89 Seiten, 1999.
- [11] Erbgut in Auflösung. Die ZEIT vom 16.6.2008. Siehe zu diesem Thema die Beiträge in WissenschaftPlus seit 2003.
- [12] <http://www.theperthgroup.com>

## ステファン・ランカ Stefan Lanka

ドイツの生物学者。ウイルス学者。

2011年に「はしかのウイルスが存在することを証明した者に、10万ユーロの賞金を与える」と宣言し、論文を示して賞金を求めたドクターに対し「証明になっていない」と拒否したために、裁判となる。最終的に2016年ドイツ最高裁で勝訴する。つまり、「はしかウイルスの存在を証明する科学文献が存在しないことを、ドイツの最高裁は確認した」。

裁判についての解説（動画あり）

ステファン・ランカが完全証明、麻疹（はしか）ウイルスは存在しない

<https://www.jimakudaio.com/post-7822>